

職人の技

シリーズ②⑥ 〈江戸切子職人〉

堀口徹さん

堀口切子 三代目 秀石



文=岩瀬 大二
text: Daji Iwase

写真=岡本 成生
photo: Masao Okamoto

ガラスを加工した美しい器『江戸切子』。江戸の昔から常に時代と暮らしと共に歩んできた、使って楽しみ、手の中で遊ぶ、そんな身近なガラスの芸術品。

その江戸の粋と技を受け継ぐ若い世代として活躍するのが「三代目秀石」堀口さん。華麗かつ微細な技術の新作で次々と賞を獲得している気鋭の職人だ。

しかし、堀口さん自身は、自分の職人としての在りようについては、実に自然体だ。職人の道に飛び込む際も、特に深い理由はなかったという。

「こういう仕事をしたいか、と考えたときに、あるものを何か受け継ぐ、引き継ぐ、そしてそれを伝えたいと漠然と思ったんです。職人とか、

宮大工とか。振り返れば実家が江戸切子を作っているじゃないかと。これでもいいじゃないか！と思っただんです（笑）」

高校生で決断し、大学を卒業して実家の堀口硝子に入社。包装、配達、加工、営業と一通り経験し30歳になって職人に専念。それも自然な流れ。

「職人として自分が二個の加工をするよりも、会社員として、営業をするべきときがあった10年。でも、そこでお客様に育ててもらった。それが今、江戸切子を創作する上でとても生きています」

常に使われてこそ…が江戸切子の真骨頂。コンクール

に出展するものは、芸術性、技術力を極限まで突き詰めるが、実際の商品はその芸術性、技術性を使う人に喜んでもらえるかだ。それが江戸切子の伝統でもあるのだと堀口さんは言う。

「僕が好きなのは『伝承』ではなく『伝統』。時代によつて楽に、よりいいものができるのであれば、それを取り入れる。逆に unnecessaryなものは省いていく。取り入れて省いて、省いて取り入れてをずっと繰り返して、ある一定期間たつたところで、それを伝統と呼ぶのでは？」

伝承と伝統。ただ承つて伝えるのではない。

「祖父である初代秀石の教えは直接受けられなかった。だから自分の中でいい形で解釈して、こうだったんじゃないかと想像して、今の時代の江戸切子を作りたい」

江戸切子は、途絶えることなく続いてきたが変化もしている。色の乗せ方、カットの仕方、ガラス特有の映り込みを効果的に使ったもの。それらを実現したのは、ガラス自体のクオリティーの進化、そして職人というクリエイターたちの欲の成果。どちらも、最終的には、江戸切子が「使われてこそ美しい」ものであるというコンセプトを具現化するため。だから変化するのは当たり前。

「実際、献上品のような品も出てきたし、昔からずっと続いている、使われてなんぼのものもあり続ける」

「江戸だからこうしなければいけない」という決めごとは、今後緩やかになっていくだろうというのが堀口さんの読みであり、実感。

「そこを狭めちゃうとつまらない話になっちゃうと思うんです。江戸切子らしさというのは守らなければいけません、ここをこうやったらきれいだろうとか、面白いだろうなというのを制限するということにもなりかねない。やっぱし、いいものを作り出すために、制限をされたくないという思いがありますね」

やっぱし、という江戸言葉が歯切れよく聞こえた。昔は素材もなく、各地との交流も活

伝承ではなく
伝統の担い手として。



発ではない時代。制限を設けずいろいろなことに取り組めるのは、江戸切子職人として、幸せなことなのだろう。

「そう思います。逆にいえば、今の道具や素材ではまだまだ物足りないというものもあります。これからもどんどん面

白くなってきますよ」

三代目としての創作活動。今、注力していることを聞いた。

「焼き物は使っていくうちにいい風合いになっていく。ガラスは悲しいかな、買った時が一番いい状態なんですよね。欠けたりして状態が悪くなって

いく。じゃ、劣化していった後でも、ある時、お客さんがこの器の良さを発見してくれるようなことってできないかなとある時、例えば映り込みの仕掛けに気付いてもらう。気付いてもらったその時が最高地点。そんな切子を作りたい！」



PROFILE

ほりぐち・とおる

昭和51年、東京に生まれる。大学卒業後、株式会社堀口硝子へ入社。平成11年二代目「秀石」(須田富雄、江東区無形文化財)に師事。江戸切子新作展にて数々の賞を受賞し、平成20年、三代目「秀石」を継承。株式会社堀口硝子を独立し、堀口切子を創業。最年少の組合員として、東京カットグラス工業協同組合に加盟。平成21年には、江戸切子新作展にて「Inside beauty」が最優秀賞の「経済産業省製造産業局長賞」を受賞。